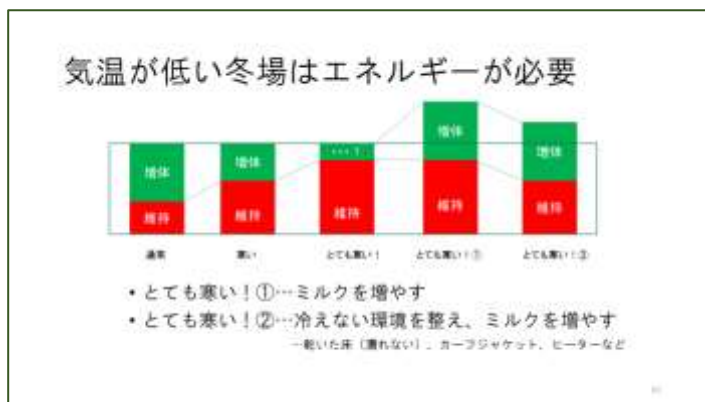


あしよろ・ハードサポート通信

年が明けて春先のような陽気の日もあり、比較のおだやかな気候が続いて過ごしやすい1月ですが、それでも子牛にとっては「寒い」冬です。今月も子牛の話題を続けます。

◆ 維持のエネルギーと、増体のエネルギー



哺乳～4カ月齢くらいまでの子牛にとっての適温帯は13～25℃とされています。図は子牛のエネルギー要求量のイメージで、適温帯の通常時より寒くなるにつれて、体温を保ち生きていくために必要な「維持のエネルギーの要求量(赤)」が増えていきます。

寒くなっても通常時と同じ哺乳量のままだと、赤の「維持」要求量が増えることで、緑の「増体」に向けられるエネルギーが足りなくなっていくます。こうなると子牛の発育が悪くなり、抵抗力が落ちて下痢や風邪をひきやすくなってしまいます。



写真：町内の子牛 ジャケットを重ね着して、さらにネックウォーマーも

底冷えを断ち、敷料をたっぷり入れ、ヒーターで温めたり、ジャケットを着せたりして「冷えない環境」を整えること、その上で、ミルクの量を増やしていきましょう。

◆ スターター摂取でルーメンを育てる

右は ①ミルクのみ、②ミルク+乾草、③ミルク+穀物(スターター)で生後6週間育てた子牛のルーメン絨毛の写真で、③ミルク+スターター区での絨毛が最も充実しており、絨毛の発育には穀類が必要なことがわかります。



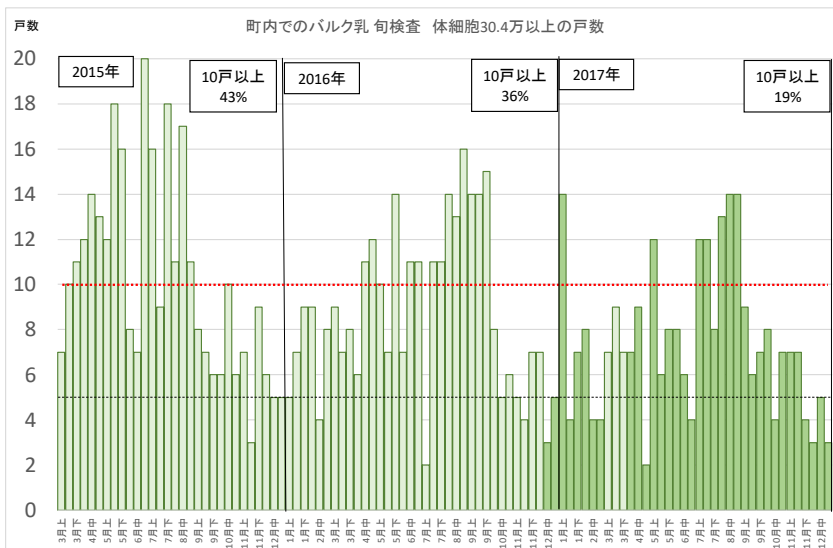
子牛には毎日、新鮮なスターターを与えます。食べ残しは翌日、離乳子牛に与えると、あっという間に食べ切ってくれるので無駄になりません。たっぷり哺乳している間は、満腹感から、スターターの採食量があまり伸びませんが、離乳に向け2～3週間かけて段階的に減乳していくことで、スターターの採食量が目に見えて増えていきます。離乳近くでスターターを2kg以上採食できるようになる子牛は結構いますし、そうなると、離乳時のショックや増体の停滞をいくらか抑えられるようです。



足寄町内でも、新しい哺育舎や育成舎が建ちつつあります。後継牛が充実してくると、慢性乳房炎牛や、乳房・乳頭配置が悪い牛など、手のかかる牛を積極的に更新できるようになり、結果的に経営に好影響をもたらします。

子牛は酪農場の未来です。今年は1頭も失わずにすむ年にできるよう、今一度、子牛管理を振り返っていただけたらと思います。(久富聡子)

- ・ 1月26日(金) 13時からMPアグロ社・ナーリン社の協力で、安井喬博士(ケミンジャパン社)を講師に「飼料を最大限に有効利用する」ための勉強会を開催します。
- ・ 2月には、営農部佐藤さんによる搾乳勉強会を開催予定です。
- ・ 2月23日(金)に日本全薬工業社が幕別町百年記念ホールで開催する「哺育を考える～現場に即した発見と対策～」研修会に久富が講師として参加し、螺湾地区の酪農家・木村晴美さんもパネラーとして登壇なさいます。詳細を別紙にて添付します。ご都合の付く方は、どうぞお申込みください(定員100名・2/9締切)。



・ 左は町内での15年～17年12月までの旬検査で、体細胞が30.4万を超えてしまった戸数の推移です。旬検査で引っかかる戸数は年々減少しています。18年は30.4万を超える数が赤線の10戸を下回る年になってくれたらと思います。